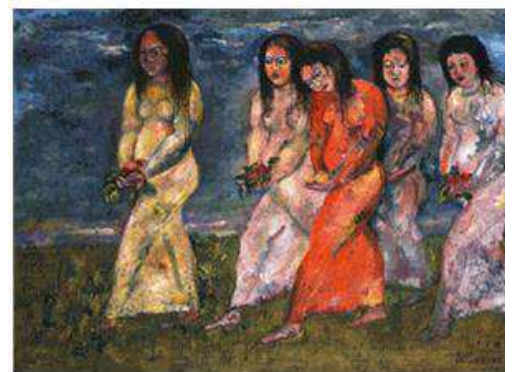




3日の昼前に倉敷に着いてしまいました。寄り道の第一希望は大原美術館です。エル・グレコの受胎告知を見るのが長年の夢でした。以前、城山三郎の「わしの眼は十年先が見える 大原孫三郎の生涯」を読んだとき、大原孫三郎の剛毅な生涯に感嘆したものです。そして、彼のために絵を買い付けた児島虎次郎の審美眼を目の当たりにしたいものだと願っていたのです。昨年東京都美術館のエル・グレコ展を見て、「無原罪の御宿り」の大作に感動しました。それに比べると小ぶりでしたが、大原美術館によくぞ、この作品があるものだと、感心しました。よその美術館で所蔵している様々な、エル・グレコの「受胎告知」よりも美しい作品ではないかと思えます。その他、たくさんの19世紀以降のフランスの絵がありました。夢中で見て回りました。

今回、はじめて知った関根正二（1899-1919）の「信仰の悲しみ」の絵には非常に衝撃を受けました。この絵の前に何度か立ち尽くしました。解説に、「関根自身がこの作品について『朝夕孤独の淋しさに何物かに祈る心地になる時、ああした女が三人又五人私の目の前に現れるのです』と語っています」とありました。殉教の道と思える道を黙々と、しかし毅然と花を抱えて歩いて行く女性のまぼろしです。貧しかった彼は同じキャンバスに何度も描き替えしては作品を仕上げたというのですが、彼の心の叫びが感じられました。



荻原守衛（1879-1910）の「坑夫」を見ると、ともかく圧倒されます。安曇野にある碌山美術館を訪ねた時、彼の「デスペア」を見て、日本にこんな天才彫刻家がいたんだ！と深く感動し、涙が出てきたのを覚えています。大原美術館でも彼の作品を見ることが出来て、幸せでした。作品が訴える力は、彼の師を超えていると思えるほどです。安曇野の山々の稜線を見て育った芸術家の目には捉えるべき本質がくっきりと見えるのでしょうか。

工芸館で濱田庄司の作品を見た時は、日本人であることを嬉しく思うほどでした。「用の美」とし、庶民の日常生活の中から生まれた、素朴で大胆な、美しい陶芸があります。民芸運動のグループがこれらを認めて、さらに多くの作品が生まれ、それらを日常的に使いこなす楽しみを味わせてくれるのが嬉しいです。また、棟方志功の作品展示室の建物自体が、興味深いものでした。古い米蔵を芹沢銈介がデザイン、改装させ、作品の趣と合致する骨太で重厚な雰囲気がありました。

西洋から東洋、オリエントまで、コレクションした児島虎次郎の目は素晴らしいものです。彼の記念館があり、彼の多彩な作品を見ることができました。彼と彼の目を信じてお金に糸目をつけずに蒐集した大原孫三郎のおかげです。大原は、倉敷教会の設立の際の最初の信徒であったとのことでした。日本で最初に孤児院を作り、児童福祉の父と言われるクリスチャンの石井十次と親しくし、彼の慈善事業を助けています。児島の妻は、石井十次の長女とのことでした。大原美術館はキリスト教抜きにはなかったのだと実感しました。

夕方にかけて、倉敷市内の美観地区をゆっくり散策し、江戸後期から明治にかけての商家が並び、ノスタルジックな家並み、路地、川縁をたっぶり味わいました。また、倉敷教会も訪ね、有形文化財に登録されている見事な教会堂を拝見しました。その晩は偶然入った食堂で活きのいい魚料理を堪能し、倉敷駅前のビジネスホテルに投宿しました。